

今週の為替相場見通し(2024年12月23日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		153.17 ~ 157.93	156.44	155.50 ~ 162.50
ユーロ	(ドル)		1.0344 ~ 1.0535	1.0432	1.0250 ~ 1.0550
(1ユーロ=)	(円)		159.85 ~ 163.80	163.06	161.00 ~ 166.00
英ポンド	(ドル)		1.2475 ~ 1.2730	1.2566	1.2500 ~ 1.2700
(1英ポンド=)	(円)	*	193.66 ~ 198.95	196.65	193.00 ~ 200.00
豪ドル	(ドル)		0.6199 ~ 0.6382	0.6251	0.6175 ~ 0.6400
(1豪ドル=)	(円)	*	95.81 ~ 98.74	97.81	97.00 ~ 100.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 田川 順也

(1)今週の予想レンジ: 155.50 ~ 162.50 円

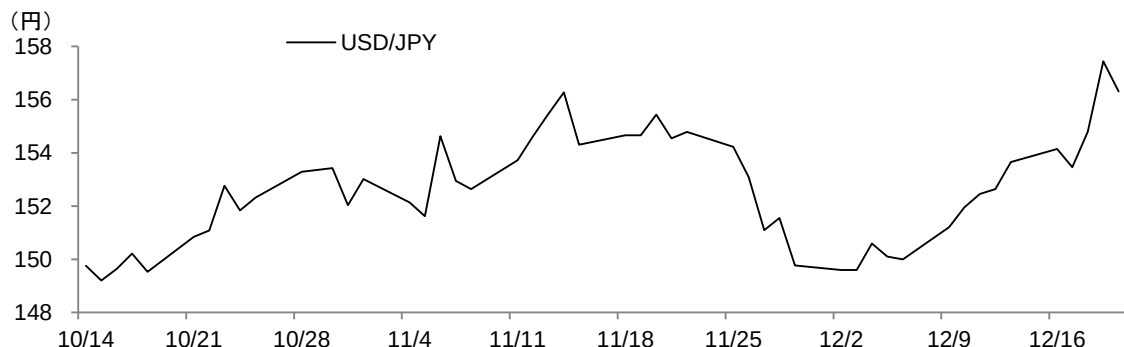
(2)ポイント【先週の回顧と今週・来週の見通し】

先週のドル/円は横ばい推移後上伸した。153.45円で16日の東京市場をオープンしたドル/円は朝方軟調に推移も、公示仲値にかけて堅調推移。その後は欧州時間を含め154円を前に上値重い推移。北米時間は米12月サービス業PMI(速報)が予想を上回ると154円台に乗せるもそこから上は売り優勢の展開。17日、東京時間は154円台前半で動意なしの展開も、次第に利益確定売りが出る流れ。欧州時間入り後は株式市場軟調を受けドル/円も頭を抑えられた。北米時間では株式市場軟調が継続、米債利回りも低下したことから週間安値となる153.17円まで下押し。18日はイベント待ちに153円台半ばを挟んで方向感の出ない展開。迎えたFOMCでは、タカ派的利下げと受け取られ、パウエルFRB議長会見もタカ派的となると155円台目前まで上昇。19日は日銀金融政策決定会合で金利据え置き発表と共に今後の利上げに対して慎重なスタンスが聞かれると157円台乗せ。北米時間では米7~9月期GDPおよび個人消費、12月14日週米新規失業保険申請件数が事前予想比良好な結果となると米金利上昇と共にドル/円も一段と上昇。20日の東京時間朝方には週間高値となる157.93円を示現。ただ、加藤財務大臣のけん制発言や輸出企業の実需の売りに加え、週末にかけてのポジション調整もあり失速。北米時間は複数の米経済指標が軟調な結果となると米金利低下からのドル売り優勢、一時156円割れ後、156.44円で越週となった。

今週・来週のドル/円は堅調な展開を想定。節目と考えられた155円は日米政策会合を経てあっさりと通過。来年の利下げ回数予想を減少させたFOMCと来年春まで利上げをしないとも受け取られる発言が聞かれた日銀という図式中、為替市場ではドルロング・円ショート共に取りやすいポジション。11月後半以降の投機筋の円ポジションを見るに日銀利上げ期待から円ショートが一層、12月は円ロングに傾いたということに鑑みれば所謂円ショートを含め、投機筋がショートポジションを作る糊代は大きいのでは。年末で流動性が薄くなっていることもあり160円乗せは時間の問題と見る。その場合、次のターゲットは7月高値である161.96円となろう。今週は米12月コンファレンスボード消費者信頼感、米11月耐久財受注や米11月新築住宅販売件数などの米経済指標が予定されている。結果が悪かったとしても、日銀利上げ期待後退の円売りがあることからドル/円は下がりづらく、結果が良かった場合は米金利上昇と共に素直にドル/円が上がるような上下のリスクが均衡しないような展開で構えておきたい。あわせて、本邦企業による米鉄鋼大手のM&Aについての進展も頭の片隅に入れておきたい。いずれにしても、ドル買い・円売りの両面でドル/円は底堅い展開を想定している。

(3)先週末までの相場の推移

先週(12/16~12/20)の値動き: 安値 153.17 円 高値 157.93 円 終値 156.44 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 1.0250 ~ 1.0550 161.00 ~ 166.00 円

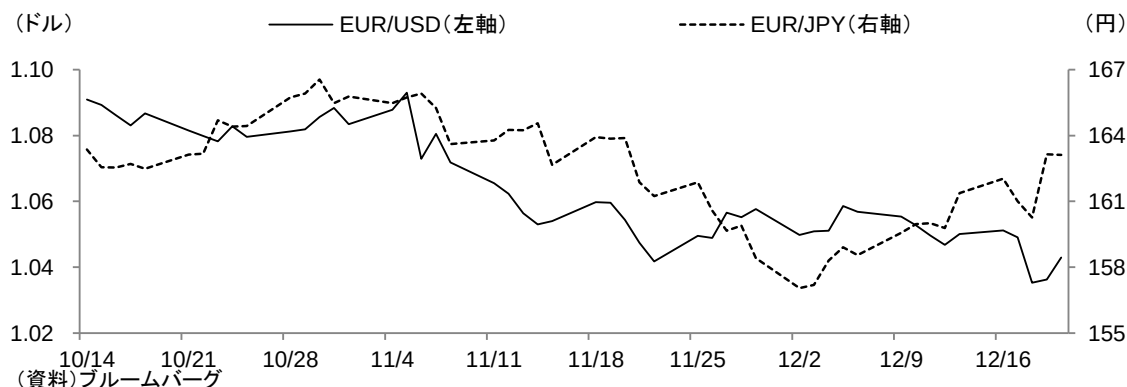
(2) ポイント【先週の回顧と今週・来週の見通し】

週初16日のユーロ/ドルは1.0512でオープン。米経済指標やシュナーベルECB専務理事の急速な利下げを否定する発言など、多少材料は出たものの、1.05台を挟んで方向感のない値動き。17日は東京時間に週間高値となる1.0535を付けるも、英10月雇用統計の内容を受けたユーロ/ボンドの大幅な下落や独12月IFO企業景況感の下振れで反落。その後の独12月ZEW景気期待指数の好結果もありやや値を戻した後は、翌日にFOMCの結果公表を控えた様子見ムードもあってか、前日と同水準のレンジ内での値動きに留まった。18日はFOMCで市場予想通りに▲25bpの利下げを実施も、ドットチャートの上方修正やパウエルFRB議長のタカ派な発信に全面ドル買い。ユーロ/ドルも急落し、一時週間安値と1.0344まで値を下げる。一服後も上値は重く推移した。19日は1.04台前半までじりじり反発するも、米7~9月期GDP(確報)など、米経済指標の上振れを受けたドル買いに押され、1.03台半ばまで反落してクローズ。また日銀金融政策決定会合で現行の政策維持が決定。植田日銀総裁のハト派的な会見もサポートにユーロ/円は3円以上値を上げる展開となったものの、ユーロ/ドルに大きな影響は出なかった。20日は特段新規の材料のない中で、再度週間最安値水準まで値を下げるも、一服後は週末に向けた調整が優勢。米金利の低下に伴うドル売りに1.04台前半まで反発し、1.0432で越週した。

欧州はフランスやドイツの政治不安や、トランプ次期政権下による政策が経済に及ぼす影響の大きさなど、依然として先行き不透明感は強い。特にトランプ次期大統領は、各国の関税率について具体的な数値を示すことも増えてきている中、「欧州連合は、石油・ガス購入で対米黒字を埋める必要がある」と発信するなど、遂にユーロ圏をターゲットにした発信もなされ、域内経済への更なる景気減速懸念が強まる状況下、ユーロの下押し圧力は引き続き強まっていくものと考えられる。またECB高官から急速な利下げを否定する発言は出ているものの、インフレの鈍化や景気後退懸念の高まりから、順調に金融緩和を続けていくという見方が根強い。一方米国は、堅調な経済状況やそれに伴うインフレ進行への警戒感から、ドットチャートは上方修正され、パウエルFRB議長の会見ではタカ派な内容が示された。米国の来年の利下げは当初織り込まれていたスピードで進みそうになく、両国の金融政策の差異がユーロには逆風になると思われる。以上からユーロが上昇する材料に乏しく、年始にかけては軟調な推移になることを予想する。今週のクリスマス休暇や年末年始に向けて市場参加者の減少が想定されるタイミングでは、トランプ次期大統領の発言や中東・ロシア情勢などのヘッドラインによる、流動性が薄い中で、極端な値動きには注意をしておきたいところだ。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/16~12/20)の値動き: (対ドル) 安値 1.0344 高値 1.0535 終値 1.0432
(対円) 安値 159.85 高値 163.80 終値 163.06



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2500 ~ 1.2700 193.00 ~ 200.00 円

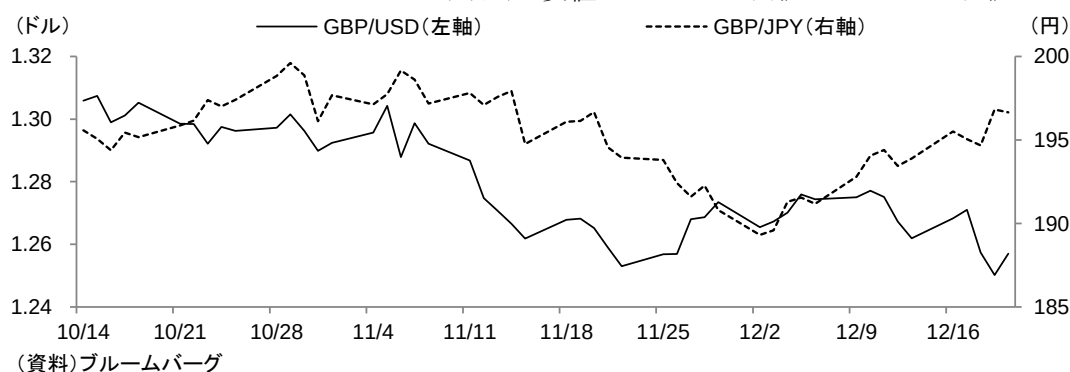
(2) ポイント【先週の回顧と今週・来週の見通し】

先週の英ポンド相場は、若干の下落。16日に1.26台前半で取引開始。英12月PMIはサービス業が予想を上回り英ポンド堅調な立ち上がり。午後に米12月製造業PMIが予想以上に落ち込むと英ポンドは一時1.27レベルまで買われる。17日は英10月の賃金データが予想を上回ったことで、2025年の英利下げ見込みが下がり英ポンド買い地合いに。米11月鉱工業生産が予想外に減速しドルが弱含むと1.27台を回復。18日は、英11月CPIが高水準となったことで英ポンドは上昇で始まるも、FOMCの“タカ派”利下げを受けたドル買いに押され、米国時間には1.25台半ばへ下落。19日は1.26台半ばへ反発する中、英中銀が予想通り金利据置きを決定。ややハト派的な委員会見通しを受けて英ポンドは売られ、一時1.24台後半まで値を下げた。週末20日は米経済指標が予想を下回る中でドル売りとなり1.25台へ買い戻された。対円では上昇。16日に194円台前半で始めると、日銀の利上げ先送り観測による円売りが続き195円台後半へ上昇。18～19日にかけてはFOMC後のドル買いと、日銀の金利据え置き後の円売りが相まって198円台へ急進。しかし、週末20日に三村財務官のけん制発言も見られ、196円台まで押された。

向こう2週間の英ポンド相場は、対ドルでレンジ推移を見込む。多くの市場参加者がクリスマス休暇に入るため、基本的には大きな動きは想定していない。データ面からも特段の材料はないが、一点、対円の動きには注意が必要。先週20日にも見られたように、今年の介入ポイントであったドル/円158円レベルでは一時的に介入警戒感が高まるだろうが、流動性の薄い市場で、そこを抜けるとさらに円売りを仕掛けやすい状況のため、160円を超えてもう1つの介入ポイントの161.80円付近まで一気に走るリスクも考えられ、ポンド/円については上方リスクに留意。なお、英市場は12月25日(水)、26日(木)および2025年1月1日(水)が休場となっている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(12/16～12/20)の値動き: (対ドル) 安値 1.2475 高値 1.2730 終値 1.2566
(対円) 安値 193.66 高値 198.95 終値 196.65



4. 豪ドル

金融市場部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 0.6175 ~ 0.6400 97.00 ~ 100.00 円

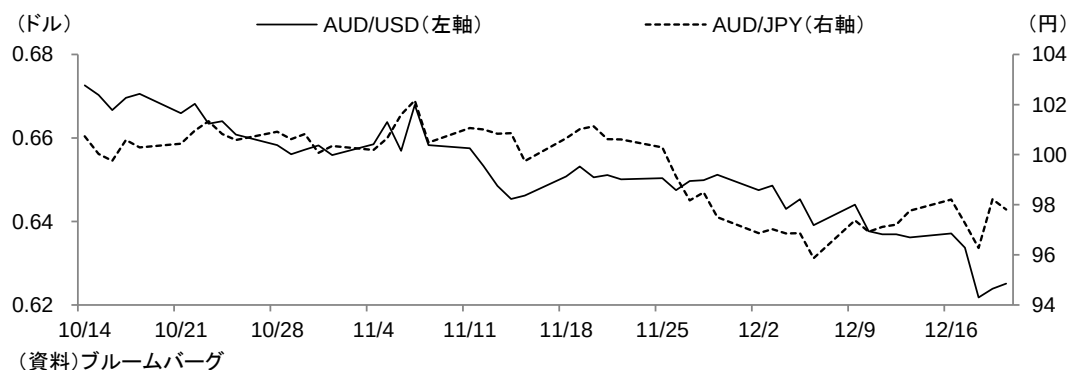
(2) ポイント【先週の回顧と今週・来週の見通し】

先週の豪ドル相場は週後半にかけて下落した。16日の豪ドル相場は0.6370付近で取引開始後、動意なく推移。一時週高値である0.6382を付けるも、その後は戻される。高水準となった米12月PMIを受けてのドル買いの流れが一巡した後はドル売り基調となり豪ドルも上昇し、ロンドン時間に売られていた分を戻した。17日、0.6370付近で取引開始後、一日を通して売り優勢。米11月小売売上高が予想対比堅調だったことも豪ドルの下値を追う展開を後押しした。18日、FOMCを控えたポジション調整からじりじりと下落。その後のFOMCでは予想対比タカ派な見通しとなったことを受けてドル独歩高となり、豪ドルは急落し2022年10月以来の安値を記録した。19日、朝方はFOMC後のドル買いの流れを引き継ぎ豪ドル売りとなり、週安値である0.6199を付けた。その後は買い戻されて0.6265近辺まで上昇も、米7~9月期GDPが上昇修正されたことを受けてドル買いが強まると下落して引けた。20日、0.6230近辺で取引開始後、序盤はやや安値圏で推移。米国時間に米11月PCEコアが予想対比軟調となったことを受けて米債利回り低下からのドル売りとなり、豪ドルは0.6274まで上伸。その後は小幅に戻し0.6251で越週。

今週と来週の豪ドル相場は底堅い展開を予想。先週は予想対比タカ派的なFOMCを受けてドル買いとなり豪ドルが2022年10月以来の安値まで落ち込んだものの、他方ドルに関してもドル指数が2022年11月以来の水準まで強含んでおり、ここから一層の豪ドル下落は見込みにくい。ドットチャートの変化が示しているように2025年の米国利下げ動向はトランプ新政権の動き次第などところではあるが、年内にさらにそれを警戒しに行くような動きが出るとは考えにくく、豪ドルの下値を追う展開にはならないだろう。今年最後のFOMCを終え、クリスマス、年末にかけてホリデーシーズンとなっており、そもそもの通貨休日に加えて市場参加者が少ないことからトレンドを形成するような一方的な相場にはならないものと思われるものの、値幅を伴った動きがでてくる可能性には留意したい。主な経済指標としては、23日(月)に米11月耐久財受注と米11月新築住宅販売件数、24日(火)にRBAの議事要旨公表、30日(月)に米12月シカゴPMIの発表が予定されている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(12/16~12/20)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。